

○講話

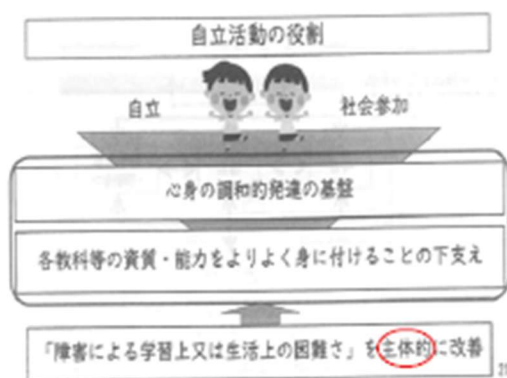
「特別支援教育における自立活動の役割と実践例」

講師 鹿児島県教育委員会 特別支援教育課 四ツ永信也 指導主事

<特別支援教育課の事業紹介>

- ・巡回型通級指導教室開設のためのモデル事業（薩摩川内市、鹿屋市、奄美市）
モデル地区の拠点校における巡回型の通級による指導の実施
- ・医療的ケア児通学支援モデル事業
医療的ケア児が福祉タクシーを通学する際に看護師が同乗する

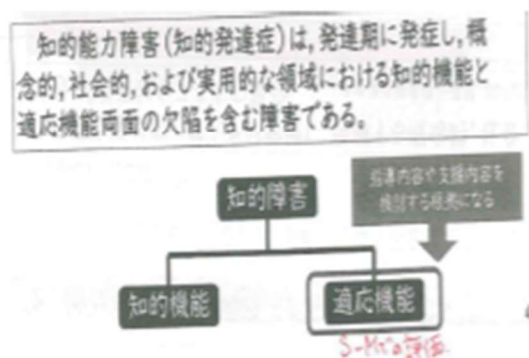
<自立活動の指導の在り方・役割>



- ・指導項目⇒6区分 27項目
- ・個人因子、環境因子との関連から「困難さ」の把握が必要

○困難さの背景から自立活動の指導内容を考え⇒個に対して配慮

<適応行動に着目し、「する」力を高める指導内容を設定する>



※適応行動の4原則

- 適応行動には年齢との関連性があること
- 適応行動は他人の期待や基準によって定められること
- 適応行動は修正可能なものであること
- 適応行動は能力ではなく行動の遂行によって定められること

○国内の研究では、知的発達の遅れのないASD児者に関してもS-M社会生活能力検査にて「身辺自立」「作業」に関して学齢期以前に獲得すべきスキルが獲得されていないことが報告されている。日常生活スキルなどの適応行動とIQとの乖離があるといえる。

○講話

「子供を中心として捉えた時の繋がり方」

講師 瀬戸口 裕二 氏（元南九州大学教授）

<個人差について>

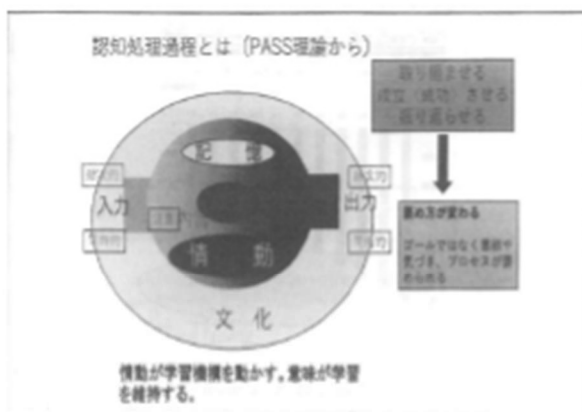
- ・個人間差：集団の個人間の差異を明らかにする⇒分類/ラベリング
- ・個人内差：個人の内にある発達の差異を明らかにする⇒効果的な教育プログラムを導く

※個別支援計画は活用されているのか？

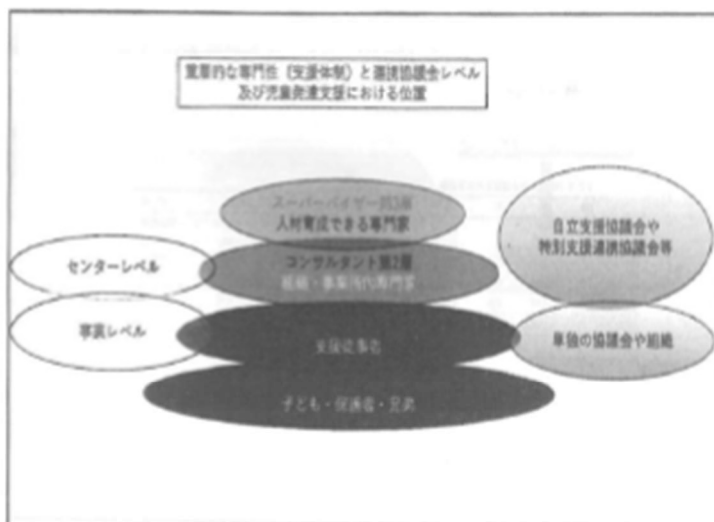
- ・苦手さを強調しない、自尊心を傷つけない
⇒ストレングス オリエンテッド（長所活用型指導）
ウィークネスへのアプローチ（認知促進プログラム）

※特性を理解し、その子に応じた自立を考える。その子に合った自己実現や自立を描いて、評価、支援される必要がある。

<認知処理過程とは（PASS 理論から）>



<重層的な専門性と連携協議会レベル児童発達支援における位置>



※子供と家族の年齢進行に伴うニーズは一貫した対応を求めている。ライフステージに沿った支援。

人材育成できる専門家の育成